１年学年だより　第４１号

考動・躍動・感動

平成２５年7月１０日（水）
尾張旭市立東中学校
１年主任　寺田泰次郎

東中学校ウェブサイトもご覧ください。
http://www.owariasahi.jp/higashi-j/

頑張ってきたからこそ・・・

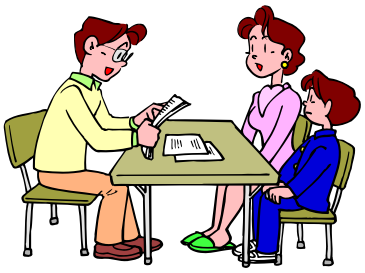
「守備では一球一球に集中し、ミスを少なくできた。取り組んできた成果が出た。」
「ケガで弱気だった自分が、味方の声援で強気で振れた。」
「声と気持ちで負けたくなかった。」
「１５人のメンバーが一人も欠けずに野球ができたことが一番の思い出です。」
「３年間やってきたことを最後に出し切れた。」
「どんなときも励まし合える最高のチームでプレーできた。」
「少しでも長くみんなと野球がしたかった。」
「３年は二人だけ。後輩がつないだ好機に感謝。」
「悔しいけど、自分たちがやってきたことは全部出し切れた。楽しかったです。」
「自分たちの最大限の力は出せたので、悔いはない。」
「球場の熱気の中、仲間と声をかけ合って、今までで一番楽しめた。」

上の言葉は、７日に開幕した『第９５回全国高校野球選手権愛知県大会』で敗退してしまったチームの選手の言葉です。また裏に２つの新聞記事を紹介しました。先生は、この言葉・記事を読んでいて、思わず胸にこみ上げてくるものがありました。**３年間、一生懸命頑張ってきた人の言葉・姿だからこそ、読んでいる人の心を打つのでしょう。**

いよいよ３年生にとっては最後の大会となる中総体が今週末から本格的に開幕します。**先輩たちの言葉・姿から、あなたたちは何を感じ、どんなことを学ぶでしょうか。**もっと言えば、**２年後にどんな言葉を発し、後輩たちにどんな姿を見せることができるでしょうか。今できることに全力で取り組むと共に、２年後を見据えた取り組みをしていくことも大切です。**

【保護者の皆さんへ】

お忙しい中、また暑い中、三者懇談のために足を運んでいただき、ありがとうございました。限られた時間ではありましたが、お子さんの学校での様子・今後に向けての課題などについてお話をさせていただきました。またご家庭での様子についても伺うことができ、今後に向けてとても有意義な時間を過ごすことができました。これからも何かお気づきの点やご心配な点等がありましたら、お気軽に担任・学年にご連絡ください。これからも保護者の方と共に、子どもたちの成長を見守っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。



「ベンチ外れた健朔の分も打つ」

一緒に挑んだ

豊田北 代打の大塚塁君と鈴木健朔君

6点差を追う9回裏。豊田北の一塁側スタンドで、鈴木健朔君（3年）が大声を上げた。「絶対打ってくれよ！」。打席には、二塁手のポジションを争ってきた大塚塁君（同）が代打で立っていた。「勝ったら学校に戻って、みんなで野球が続けられる」

3年生で唯一、ベンチから外れた。この日の試合前、ロッカールームで3年生全員と握手した。「頼むぞ」「初球から振っていけ」。そう声をかけながら、涙をこらえた。「自分も一緒に戦えないのが悔しかった」

打席に向かう大塚君も、鈴木君の大声が聞こえて泣き出しそうになっていた。代打の準備をしていたときから、鈴木君のことを思い出していた。同じ中学だった頃から競い合い、毎日のように一緒に帰った。「健朔の分も打ってやろう」

鈴木君のアドバイス通りに初球を狙ったが、力が入って投手ゴロ。試合後、鈴木君の顔を見て、また涙があふれた。「あいつのためにも良い当たりが打ちたかったです」

試合後、涙で握手する豊田北の鈴木健朔君（右）と大塚塁君＝岡崎市民

7月8日（月）朝日新聞

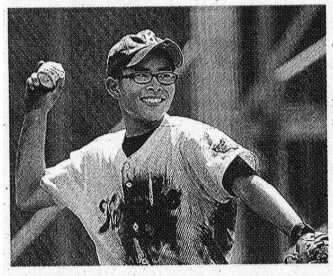
合同チーム善戦

球児の詩

重ねた夢 独りじゃない

西陵 蟹江選手

春日井商 永江選手



独りぼっちで始まった一年だった。

昨夏の大会が終わり、上級生が引退すると、西陵野球部に残ったのは、蟹江康平選手（三年）だけだった。

決して上手なわけではないが、野球は誰よりも好き。部の歴史を「自分の代でつぶすのも嫌だった」。たった一人、朝練と授業後の練習に打ち込んだ。ネット相手にボールを投げ、素振りや筋トレを繰り返した。

春日井商の永江雄輔選手（二年）もまた、一人きりだった。平日は学校で自主練習を重ねた。土日は瀬戸北総合に交じって試合に出させてもらった。

今春、期待していた新入部員を合わせても、両校とも試合をするのに必要な九人に届かなかった。「一度は大会をあきらめた」と二人。だが大会に参加する期限ぎりぎりの五月末になって、春日井商の山口浩人監督が西陵に打診。急きょ合同チームが誕生した。西陵が五人、春日井商が六人の計十一人のチームだ。

迎えたこの日の一戦。結成当初はぎこちなかったナインは、うち解けて一つになっていた。「みんな野球が好きという気持ちは一緒だから」と山口監督。声を掛け合い、最終回まで必死に起工にくらいついた。

試合後、選手たちはスタンド前で一列になって一礼。ユニホームは異なるが、黒土まみれなのは一緒だ。スタンドからはねぎらいの声が飛ぶ。親や友人、春日井商の吹奏楽部、西陵のダンス部、瀬戸北総合の選手。山口監督が三月まで指揮を執った東郷ナインの姿も。

「こんな形で終われてほんとに良かったです」。蟹江選手の表情は晴れやかだった。多くの仲間たちに囲まれて夏が終わった。（多園尚樹）

7月8日（月）中日新聞